

愛知東邦大学「東邦基礎」における初年次教育の課題

牧 恵 子

愛知東邦大学

愛知東邦大学「東邦基礎」における初年次教育の課題

牧 恵 子

目 次

- I はじめに
- II 授業報告
- III 文章の分析
 - 1 読解力を伸ばすとは
 - 2 「書くこと」を支える力
- IV おわりに

I はじめに

2011年度、愛知東邦大学で実践した初年次教育「東邦基礎Ⅰ・Ⅱ」を報告することで、本学の初年次教育の課題を整理していきたい。

さて、初年度教育を導入している大学は増加しており、2001年度では、日本全体の国公立・私立大学全体で80%が、2007年度には、97%の大学が拡大、普遍化し取り込んでいる状況である。さらに、ここ10年間の日本の初年次教育では、大きな変容があると指摘されている。⁽¹⁾

第一に、全学出動体制を取り、教員が責任を持って取り組む大学の増加である。このことは、初年次教育に関する研究者がさまざまな学部学科から参入していることであり、全学の共通教育として位置づけている点である。第二に、10年前には、大きな概論クラスも初年次教育として扱っていたが、少人数教育が基本となってきた。第三に、大学の授業重視という見方に立って、「学びへの支援」と「アクティブ・ラーニング」の導入が目立っている。「学びへの支援」としては、「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」の取り組みのなかで、「体験型学習」「初年次導入教育」を取り上げている大学が非常に多い。一方、「アクティブ・ラーニング」については、PBLや体験型学習を踏まえてのプレゼンテーション、プロジェクトという手法の導入が進んでいることに特徴がある。

当然ながら、「初年次教育」の背後には、時代のなかで、高等教育そのものが抱える課題は大きく存在している。そこには、学生の気質が変容してきていること、教育行政からの大学教育への質の変容を要請されていること、社会から求められる大学の教育効果の提示という多様な状況がある。

2011年度初年次教育「東邦基礎Ⅰ・Ⅱ」を担当し、授業中の説明を理解できない学生、自分で考える方法がわからない、自分の選択をしようとする多くの学生を前に、適切な指導とはいか

なるものであるのかという自問を繰り返しながら授業を行ってきた。本学は経営学部（地域ビジネス学科）・人間学部（人間健康学科・子ども発達学科）の2学部3学科からなり、両学部の1年生350名以上を担当者一人で6クラス開講するところから始めることになった。初年次教育のもう一つの柱である「基礎演習」という少人数授業が並行しており、「東邦基礎」と「基礎演習」との連携はこれから補完し合う方向にある。

本学の「基礎演習」では、大学生活への導入や学習習慣などの自己管理（本年度は、特にポートフォリオの導入を図り、iPod touchによる目標管理や受講履歴、出来事ブログの入力方法の支援）、人としての守るべき規範の理解、基礎教育としてのスタディ・スキルの獲得などを通して、展開している。一方、「東邦基礎」では、主に「読解力リテラシーの向上」や「レポートの書き方」を中心とした目標が設定されていた。そこで、「東邦基礎」では、学生の思考力、記述力、積極性などをみながら30回の開講を行い、最終的に、グループ発表という形での学内公開授業を実施した。

本学における科目「東邦基礎」にも大きな二つの課題がある。一つは、高校までの学校教育を受けての学習の転換であり、もう一方は、学生が社会へ出ていくときに身につけていく力である。

前者では、一般に「リメディアル教育」の必要性が問われてきている。「リメディアル教育」についてはその意義も多様に広がってきている状況である。経営学部と人間学部からなる本学の読解力リテラシーの科目と関連する科目を高校の教科と関連させると、国語科、数学科、社会科、総合学習などが挙げられるであろう。しかし、「中学、高校までに培ってきてほしい力」を考えた時、「国語力」の場合、理数教科と異なり、明確に物差しをあげて点数化できない領域であることは明らかである。高校までは、漢字や熟語などの学習、一区切りの文章から、語句を空欄に埋め、主題をいくつかの中から選択するという練習を重ねている。「国語表現」「小論文指導」という特別な授業を受けて、本学に入学している学生はわずかである。このような状況で、漢字の勉強や高校までにやってきた読解指導を「リメディアル教育」とは言い難い。本学のリメディアル教育とは何かという課題には明確な答えが出せないまま、模索している状況だ。

また、後者の社会へ送り出していける「読解力リテラシー」では、学生にどんな力を与えていくことが必要であろうか。「東邦基礎」という科目は、文部科学省採択「就業力育成事業の取り組み」のなかで出発し、読解力リテラシーを中心とした内容で始まった。「就業力」という言葉からも想像できるが、この4年間という時間のスタートを、最終地点から見直すことも必要である。

一方で、学士力としては、卒業論文や卒業研究を大学での学びの終着点としてきた。昨今では、「卒業論文」を必須単位としない大学も増え、他の履修単位で補っているのが現状である。本学で、卒業時にどういふところまで高めていくのかは、両学部の性格にも依っている。いずれにしても、「社会で必要としている理解力、表現力」とを見極め、本学のスタンダードを学科ごとに構築しているなかで、科目「東邦基礎」としてできることは何かという問いに応える形で、本報告を行いたい。

本稿Ⅱ章では、前期15回、後期15回の授業で実施したことを、主な流れに沿って報告する。Ⅲ章では、授業を通して、受講生が書いたものを中心に分析する。Ⅳ章では、初年次教育「東邦基礎」としての取り組むべき目標を改めて仮説し、今後の方向を提案したい。

Ⅱ 授業報告

1 「東邦基礎Ⅰ・Ⅱ」

(1) 平成23(2011)年度「東邦基礎Ⅰ」

① 各回の主な内容

前期は、第1回から第5回まで表現練習を実施し、第6回から第14回までは、主にレポート作成(800字程度)を目標とした。レポートのテーマは、学科ごとに課題を変え、枠内で選択できることとした。

「東邦基礎Ⅰ」の主な内容

1	調査 ガイダンス (1)	TV録画を見て、メモをする
2	ガイダンス (2)	本講座の目標・内容・評価方法などの説明
3	表現練習	「話し言葉」を「書き言葉」に書き換える
4	わかりやすい伝え方の練習	視覚情報を言語情報にする
5	漢字学習の方法	
6	中心テーマの紹介	
7	マップで考える方法を知る	
8	テーマを広げる(中心テーマから、具体的なテーマへ)	
9	調査の実施とメモの取り方	
10	レポートの各項目にあわせたワークシート記入(「はじめに」)	
11	〃	(本論の箇条書き)
12	〃	(「終わりに」)
13	レポートをword入力する	
14	レポートの読み合い(相互添削と感想)	
15	語句の復習、前期のまとめ	

② 第1・2回 ガイダンス・メモの力

本年度の第1回目は、以下のような4点で、ガイダンスと東日本大震災をもとにしたメモの力を調査することであった。

- ・「東邦基礎」の受講の方法やレポートについての説明を、メモ(ワークシート)を取る
- ・東日本大震災のインタビュー映像15分ほど見ながら、メモ(ワークシートの空欄)を取る
- ・実際に、震災後に自分が取った行動の記述①
- ・もし、今、大地震があったらどうするかの予想記述②(箇条書きの指定)

以下の学生の書いた箇条書き文の例からも分かるように、学生一人ひとりの感情や行動が読み

取れる内容となっていた。箇条書き指定であったので、長い文の記述になっていないが、話し言葉を交えながらも実感のある言葉が現れたところであった。こうした「実感」「行動」「書くこと」が一致するところで、表現活動をスタートさせた。

[学生の記入例]

①「実際に、地震があったとき、あなたはどのような行動を取りましたか」に対して

- ・非常用のカバンを枕元に置いて寝た。
- ・いらないコンセントを抜いておいた。
- ・家で避難所などを確認した。
- ・いつもは電気をすぐつけるが、ギリギリまでつけないようにした。
- ・災害の時のひなん場所と救急袋の再確認をした。

②「もし、今、大地震があったらあなたはどうしますか」に対して

- ・もし家に向かっていいる途中で何か困っている人や、ケガをしている人がいたら声だけでもかける。
- ・避難所では一人ぼっちでいる人とかに声をかける。
- ・困っている人がいたら、手を貸して一緒に生きのびる。
- ・私たちは何もわからない小さな子ではないので、大人と一緒に活動する。
- ・子ども好きなので、混乱している子とかを安心させたい。

③ 第3回 レポート表現への添削活動と清書

【話し言葉から書き言葉への練習シート例】

書き換えワークシートの例

次の文章を、レポートの表現に変えてください。例にならって、下線を引いて、表現を直してみよう。文末表現も「だ・である」体になります。

「携帯メールのメリットとデメリット」

携帯電話が使われるようになって、いつでもどこでも他の人（例）なり人と連絡が取れるようになりました。そこで、本レポートでは、携帯メールについて、メリットと悪い点（デメリット）を考えた。

まず、メリットは、たくさんある。手紙と違って、相手の名前、自分の名前、住所などを、その人（相手）に書くなくていいんだ。内容もいきなり言いたい話題に入ることができるし、他の人に見られる危険性も少ない。いし直接会って話すよりも書きやすく電話より簡単に連絡が取れちゃう。

メールの絵文字もすごく種類が多くて、新しいデコメなんか、付いてると嬉しくなっちゃう。絵文字や顔文字、記号が入っていて、微妙な文章表現ができる携帯メールは、ほんとどこかいいと思います。では、デメリットは何？やっぱ、直接、合って作られる人間関係よりも気遣い（気遣い）がしなくていいことかなあと考えています。メールは、手軽で、誰とでもどこでもいつでも連絡が取れて、とっても便利な機会だけど、人と人のつながりでは危険性があるらしい。

【採点者からのメッセージ】

【採点者の名前・記号】

第3回目に、箇条書きからまとまった分量を書き慣れる練習を実施した。これからレポートを書いていくための表現練習の一つである。

「レポート表現（常体や書き言葉の使用など）」という表現方法を説明した後、誤ったレポート表現を添削させ、学生相互に答え合わせを行った。（左：練習シート例参照。学生のワークシート掲載承諾）これは、話し言葉や文末表現、誤字の入った他者の文章（400字程度）を書き直す活動であり、積極的に直していた学生が多い。このぐらいならできると思ったようで、自信のある様子がうかがえた。チャレンジ課題として、さらにもう1題提出し、レポート全体をすべて手書きの清書をさせ

た。社会に出て、いつもパソコン入力で済ませるわけにはいかないので、手書きで伝わる字を書けることも大切な練習である。

④ 第4回 視覚情報から言語情報へ

第4回目には、幾何学模様の絵を言語化することを、ゲーム形式で実施した。簡単な図形から成る絵を「言語表現」に置き換え、言語表現から、絵を見たことのないメンバーと交換し、再現させる形である。

平易な図形であり、書き出しの文のヒントも与えたことから多くの学生が課題に積極的に関わっていた。教員のところへ、活動と一緒にいったペアになって提出をさせた。一人ずつの顔がわかり、ほぼ絵が完成したペアの学生には笑顔があった。私も声掛けをしながら、ペアで作成した文章と絵を受け取った。

また、活動後に、「初めての人と一緒に活動ができて、よかった」「ペアの人がわかりやすい文章だった」などと、プラスの評価コメントが多かった。こうした「伝わる」という実感のある活動を数回続けていき、「書いた文章」が人に伝えるものであることを定着させることが重要であることを確認した。

⑤ 第6・7回 マップを書こう

思考をマップ化させるために、連想ゲームの形で、中心に言葉を入れて拵げさせた。マッピングには、戸惑う学生が多く、単純な連想ゲームとして捉えさせることも難しかった。中心枠に、「水」「ペットボトル」「観るスポーツ」「遊び」「絵本」などの言葉を準備し、学生に、外枠の○（4枠を準備）に言葉を入れさせた。言葉を入れた割合は、以下のようである。

- ・ 2，3枠に言葉入れのできた学生の割合 約25%
- ・ 4枠に言葉入れのできた学生の割合 約50%
- ・ 5項目以上の記入のできた学生の割合 約25%

この割合をみても、大半の学生がアイデアをマップ化することに慣れていないことが明らかになった。現在の大学1年生が学習してきた小学校から高校の「国語」の教科書には「マップ化」が教材化されている例もあり、次第に浸透しつつある教育方法となってきた。そこで、初年次では、情報のキーワードを視覚化すること、並べていくこと、分類することなどに注目させるところからスタートすることも重要である。

⑥ 第9～12回 レポート作成のためのワークシート

下記のように、学科ごとにテーマを変え、レポートを書くためのワークシートに記入させつつ、プロセスを辿りながらレポートの形式に仕上げる指導を実施した。

- ・ 地域ビジネス学科 「企業の販売・営業以外の活動事例を探す」
- ・ 人間健康学科 「支えるスポーツの事例報告」
- ・ 子ども発達学科 「絵本の読み聞かせと遊びによるボランティア計画」

次に示すようなワークシートに沿って、各項目を少しずつ叙述しながら、3授業時間を配当した。序論のところには、課題の確認や自分の体験を書く部分を設定し、自分自身とテーマとを結

びつける表現を探させた。本論では、引用したweb資料を箇条書きにまとめさせた。結論では、調べてわかったことや意見・感想を記述させ、次に調べてみたいことを考えさせた。こうした序論や結論では、テーマが本人にとって「調べたい」という切実なものになっていないと、なかなか記述できるものではない。ここが、切り取った表現の練習のレベルとレポートにまとめるレベルの差となってくる。

こうした課題を抱えながらも、前期授業では、「序論・本論・結論」の3段構成のフォームの中に書く活動を実施した。一般に、段落ごとに書く「パラグラフ・ライティング」手法で、ワークシートという形式に当てはめて書く指導に留まった。

2011「東邦基礎Ⅰ」 レポート・フォーマット

「 学科共通の題名

—— 副題（オリジナルで書く） —— 」

1、はじめに

- ①（課題確認）
- ②（題名に関する自分の体験や感想）
- ③（自分のテーマの選択の理由）
- ④（調査の方法 ウィキペディアやHPなど）

2、（副題を写す）

- （1）調べた経緯
- （2）内容（前期は、データの箇条書きだけとした。）
- （3）定義文（「基本用語・専門用語」とは、……である。）

3、おわりに

- ①（調べてわかったこと・発見したこと）
- ②（自分の意見や感想）
- ③（次に調べてみたいこと）

⑦ 第13～15回 レポートを読み合う

前期第14回目に、授業内で、4名の学生レポートを相互に読み合い、コメントを記すことに留まった。学生は、通常、学期末レポートを評価されて返却されることは少ないものである。「東邦基礎」では、推敲や相互添削も含めて、相互にメンバーの書いたレポートを読み合う時間を作ったことで、他者のレポートからの気づきが認められた。

（2）平成23（2011）年度「東邦基礎Ⅱ」

① 各回の主な内容

後期では、前期の課題を受け、語句学習やグループ活動を並行させて開講した。

- 1. 授業時間の2、3分割の実施と身体を動かすことの取り入れ
- 2. 毎時間を1ユニットの形で、「読み→マップ→ミニレポート用紙記入」の流れとしたこと
- 3. 紙のポートフォリオ（“can do 30”）を用いて、毎回授業後に、わかったことや感想などを記入させた。また、その紙ポートフォリオを通して、学生と個別の対応も図った。

この3点の方法は、今後も継続できる部分が多く、修正しながら活用する方向に向かいたい。

「東邦基礎Ⅱ」の主な内容

1	後期のガイダンス(1) 語句学習の説明
2	〃 (2) 小テスト 図書館活動
3	テキスト①読み方
4	テキスト①探し読みとワークシート記入
5	テーマへのアンケート調査の実施
6	アンケート調査の結果とテキスト②探し読み
7	要約力調査の実施
8	先輩のプレゼンテーションを聴く
	テキスト③探し読みとワークシート
9	テキスト④探し読みとワークシート
10	テキスト⑤ 〃
11	各自の目標を設定して、レポートの作成
12	レポート作成と提出
13	発表会の準備 (リハーサル)
14	グループ発表会 (公開授業)
15	まとめ 振り返り

「東邦基礎Ⅱ」の語句学習

回	内容
1	漢字小テスト① 同音異義語
2	漢字小テスト② 同音異義語
3	漢字小テスト③ 同音異義語
4	漢字小テスト④ 熟語
5	表現小テスト① 述語の動詞
6	表現小テスト② 主語と述語
7	表現小テスト③ 主語と述語
8	表現小テスト④ 主語と述語
9	漢字小テスト⑤ 同意語・反意語
10	表現小テスト⑥ 副詞
11	表現小テスト⑤ 書き言葉
12	表現小テスト⑥ 具体的な表現

② 授業時間の分割とパターン化

授業を時間的に2、3分割し、集中度を上げた。授業中に一度は、学生自身を立たせ、身体を動かすことを促し、時間の区切りを意識化させた。教員からの説明を手短にし、授業をパターン化し、毎授業時間が、同じ流れで進むことで、前期に比べて、落ちついて学習が進んだようである。

第一のフレームは、始めの20分程度である。その時間は、語句や表現力の小テストを毎回実施した。漢字学習とレポート表現の練習を重ね合わせて、一文形式での聞き取りテストとし、1文を3回ほど声に出して出題した。授業開始のところで、傾聴力チェックの形を取り、教室内に緊張感を与えたことは、前期に比べて学生の集中度にも影響を与えた。出題内容(上記の表参照)は、前の時間にプリント配布し自習できるように配慮した。

さらに、この語句・表現の自習ノートをチャレンジ課題とし、後期成績の一部として加えた。この課題のノート提出割合は、単位取得受講生の13%であった。

小テストをメンバーが相互採点后、自己訂正し、教室の最前列に提出するために、前に出てきて、隣の机にある紙ポートフォリオを持ち帰る形とした。この紙ポートフォリオは、毎授業時間の最後に提出していくものである。また、授業の中で、学生にアンケート調査の挙手を数えることや集計などの活動、ワークシートのフレーム記入などの板書など、学生が身体を動かすことを取り入れることを心掛けた。

第二部では、レポートの中心課題を練習した。第三部では、自分のテーマに沿って活動できる時間を設け、図書館に出かけた学生も少なくない。テーマを自由選択しない受講生は、そのまま

教室でワークシートの活動となった。このワークシートをもとに、期末レポートにつなげる形とした。

③ 紙ポートフォリオの活用

A3判を二つ折りにした「紙ポートフォリオ」を作成し、後期の毎時間に配布し、授業の感想等を記入後、回収するということを実施した。A3判左半分には、「東邦基礎」で身につけたい基礎的な目標を30点、一覧にした。例えば、「必要のない私語をしない」「説明や筆者の主張など、重要なところにアンダーラインを引きながら読める」などである。30の目標から、目標を自己設定しながら進めていった。

毎授業の終わりに、記入させた項目は、日付・自分の目標（自己選択）・今日の達成感・語句表現小テスト点数・わかったことや疑問点である。担当者からもコメントや印を押し、一人ひとりの受講生との交流を行った。

欠席した場合には、一目で「欠」（朱色）がわかることとなり、欠席の多かった学生自身も自分の書いた言葉がリアルに目の前に現れることから、わかりやすかったようだ。また、その日の提出のワークシートを「紙挟み」として活用し、欠席した際の連絡用にも使用した。レポートの書き方がわからないという感想のある学生が休んだ場合には、参考資料やワークシートを挟み、自習できるように促した。

Ⅲ 文章の分析

1 「読解力を伸ばす」とは

（1）「要約」からみた読解

Ⅱで記したように前期・後期の開講を行い、授業の分割、各パーツの指導目標や内容の変化、受講生の振り返りを重視するという3つの方法を土台としてきた。

Ⅲでは、受講生が書いた文章をもとに、本学における「東邦基礎」の授業の方向を考えてみたい。初年次教育として行われている「アカデミック・リテラシー」や「スタディ・スキルズ」は、半期講座や2、3時間の集中講座だけで「レポートの書き方」を一斉に講義しているところもある。今年度の「東邦基礎」では、実際に50、60人の受講生を対象に、「書く」という活動を実践させながら進めてきた。そこで、受講生の「書いた表現」をもとに、課題を整理したい。

本来、「読解力リテラシー」がどのように伸ばしたかを調べることは困難なことである。高校までの読解問題のような設問形式で問い、記述式で答えさせることで計る方法が行われている。しかし、現実の社会では、読解だけの部分だけを訊かれることは少なく、わかったことを表現する（話す・書く）ことで運用していくことになる。例外的な読書会や研究会でもない限り、本をもとに読み比べ、詳しく意見することもなく、日常の「話す・聞く」中心の言語生活は進んでいくことになる。「読解の実態」は捉えにくいものである。一方、OECDのPISA調査の「読解力リテラシー」では、読みの結果の「表現することの力」をみようとしているところも多い。

さらに、「表現力」というものも、いつもゼロから引き出すことは至難の業であることは明ら

かである。大人たちも、日常的に、経験的に「書かれたものをなぞる」ところから仕事をし、「過去の蓄積を踏襲」しながらオリジナルを生み出そうとしている。こうして、「読解」と「表現」とは一体化されたなかで、相互に作用しながら進む言語活動とみることができる。

大学に入って、初めて学部・学科の学習を始める1年生にとって、知識の山の中に身を置き、理解活動を行いつつ、受講を始めていくことになる。そこで、1時間の授業を自分のものにするためにも、1授業時間を「要約する」ことができるかどうか、読んだ資料を端的に把握でき「要約する」ことができるかという力が重要になり、そこを書きとどめていくことから始まっていく。「読解」と「表現」とは、そこに介在する「言語」を通して、受け渡していくことで円滑に進んでいくことになるのではないだろうか。

言い換えると、「要約」を通し、書かれた内容に盛り込まれた「言語」を受け取ることになり、今まで使ってこなかった語彙を獲得するためにも有効な方法となると考えるのである⁽²⁾。発信されたものをまずは、自分なりにこう受け取ったという「要約」が存在し、そこから、自分の疑問や意見が生まれてくるのである。

そこで、本講座でも、表現の一つとして、「要約」の手法を使用し、情報を受け取れるのかという練習を行った。あらましを読むこと（あらまし読み）と、筆者の主張や強調点を探すこと（探し読み）という2種の練習を重ね、ある程度の速さで読み、要約練習を繰り返した。

読解の演習場面では、以下の流れで行った。

- ①本全体の解説・書誌の確認
- ②今日のテキスト（1000字程度）を教員が音読（意図的に、重要なところは速度を落とす）
- ③学生に課題箇所には傍線を引かせる
- ④1、2語程度の難しい言葉を解説
- ⑤文章のテーマや問題点を確認
- ⑥筆者の意見や強調点の確認
- ⑦教員によるマップ化の提示
- ⑧学生によるマップ化の練習
- ⑨ミニレポート形式のワークシートに記入

⑨のワークシートは、すべて同じフォーマットとし、授業中のワークシートについては、要約（200字）や意見部分（100字）を原稿用紙とした。

自分で選んだ新書や入門書（活字本）を使って、要約中心のミニレポート作成を課した。全学科で共通して、コンビニエンスストアという身近なところを入口として、日本人の食生活、睡眠、会話、ネットワークなどの暮らしをみつめるという内容を資料とした。具体的には、以下の2冊からの引用プリントを学生に配布し、読解とワークシートの記入という同じ流れでの授業形態を繰り返した。

配布資料の出典

・鷲巣力『公共空間としてのコンビニ』2008年 朝日新聞出版

・竹内稔『コンビニのレジから見た日本人』2008年 商業界（新書）

配布資料のテーマ

テキスト① コンビニの定義と利用

② 日本人の睡眠

③ コンビニと会話

④ 日本人の食事（孤食・中食）

⑤ ネットワークの拠点

こうした繰り返し学習の効果として、4回目受講の学生33%から、「要約という方法の大体がわかった」という紙ポートフォリオでの記述をみることができた。受講生の書いた感想の一例を以下に記す。（学生の表記のまま記してある）

- ・要約に慣れてきた。
- ・要約が早くできるようになった。
- ・スムーズに要約できた。
- ・資料をよく読むことが大切。
- ・内容を理解しておけば、スイスイ進むことに気づいた。
- ・授業が充実してできたので、次回もこの調子で頑張りたいと思う。
- ・マップを書くとうわかりやすい。
- ・マップも一人で書けるようになってきた。

この授業回に提出されたワークシートを点検してみると、教員の説明の後で、要約基準を満たして書けていた人が、受講生の約23%となり、先のポートフォリオでの「わかった」「できるようになってきた」という記述と合せて、出席者の半分以上が、要約を意識し始めたことが確認できた。1授業時間内では、＜読み→考える→文章にする＞流れを繰り返す型を作ることが重要であることを確かめることができた。

さて、要約指導の際には、まるごとの剽窃ということは避けたい。しかし、自分の言葉で要約のできない学生には、どうやって要約できるのかは、今後の課題となり、初年次では覆い切れないところである。

（２）要約力調査

（ⅰ）要約力調査の背景

授業で扱う文章のレベルの問題を明らかにするために、平易な文章での要約力を調査した。後期には、要約練習を同一のワークシートを用いて、3時間実施してきたところである。繰り返しの要約練習で、受講生の半分以上が、要約の重要性などに気づきだしたことは、先に述べたとおりである。学生ポートフォリオに見られた「自分で重要な箇所がわからない」「マップが書けない」という感想から、読む資料選定の基準を探すために、もう少し読みやすいストーリー性のある本を選ぶことで、今回、比較調査を行ってみた。

(ii) 調査時期と対象者

2011年度11月「東邦基礎Ⅱ」授業の第7回目で、受講生出席者を対象に行った。

(iii) 調査対象資料

香取貴信『社会人として大切なことは みんな ディズニーランドで教わった』2002こう書房

「第1章 働くってことはこういうことなんだ」

「第4節 たとえアルバイトでも、仕事は仕事なんだ」 P.36-46

(iv) 調査方法

1 授業時間内で、50分間を最低条件に、文章（A-1～A-6 各800字程度、合計5000字程度）を読み、要約を書くのに重要な言葉をマップ上選ばせ、各項100字程度の要約文を書くという調査である。縮約率は、約12%である。調査方法をわかりやすく伝えるために、「まえがき」ののところを使って、要約の例を示しておいた。

(v) 調査結果

1 年生全クラスで実施した結果、50分間で、平均4.1段落の要約記述を行うことができ、100字程度の文章を4点ほど記入したことになった。日頃、積極的な姿勢を見せない学生も、内容にストーリー性もあり、身近なディズニーランドでのアルバイトのことであったせいか、集中して書き進めていた。学生の書いた文章は、「要約」というより、ストーリーのある文章に沿って「あらすじ」を書くという形であったが、大きく間違った表現は少なかった。一般に、小説を読み進めていく感じで、内容把握していた。ただし、説明にじゅうぶんな要件を満たしていない要約例も多い。主語が抜けている場合、修飾語の不足、キーワードの欠如など、表現の不足や文章全体の見出し語への理解不足が指摘できる。

しかしながら、こうした筆速を速めることで得られる達成感を重視したいと計画し調査したところもある。学生から、以下のようなコメントが返ってきた。5つの観点に分けて、以下に例示する。

① 要約することは難しい・大変

- ・要約は慣れていない（中学以来だった）。
- ・集中したが、よくわからなくなった。
- ・書くのが遅く、要約は思ったよりも大変だった。
- ・文章を短くするのをすごく悩んだ。

② 要約を客観視

- ・自分の考えを書くのは苦手であるが、要約のようにまとめるのも、大変だった。
- ・要約は難しいが、自分で理解できる文章にしていけるのは大切だと感じた。
- ・今後のためになりそうだ。
- ・100字が意外にも少ないことを実感した。
- ・何回もよみ直してなんとか書けた。
- ・読むことが大切。

③ キーワードを押さえることの難しさ・マップが描けない

- ・マップが描けない。
- ・書きたいことが多すぎて、うまくまとめられない。
- ・5つの言葉がよくわからない。

④ やる気をみせている

- ・達成感に満ちあふれている。
- ・しっかり要約できるようにがんばる。

⑤ 資料内容への感想

- ・ディズニーの文章はおもしろかった。
- ・バイトのことだった。

これらの感想から、授業時に、教員が「要約とは」と説明する以上に、学生自身が学び取ったことは多かったようである。「要約」の意味を学生なりに受け止めていくことが重要ではないだろうか。「要約」が難しいことを知り (①)、その意味を自分の中に取り込んでいる (②)。また、小見出しや重要な言葉の抜き出しの難しさ (③)、テーマへの関心 (④⑤) を振り返っている。こうした内容は、受講生自身が自分と向き合いながら獲得することである。そして、さらに、こういう感想の持てない学生へのリターンも重要である。

今回のような読み物の要約 (粗筋) を、講座の途中で取り込み、通常と違った読み書きの速さを味わうことも、受講生の自信につながると考える。

(3) 表現力の伸長

① レポートの「テーマ」

2011年度は、前期・後期とも、原則は自由課題のレポートであった。先の授業報告で述べたように、前期は、学科に応じた枠を設け、その中で自由に書かせた。後期は、まったく自由に選択ということで、授業中には、「睡眠」「食事」「コミュニケーション」などを話題に、資料を読みながら進めていった。

前期と後期の学生が、自由に取り上げたテーマの一例を以下に挙げておく。

[前期] 学生が探したテーマ例

愛鳥 / 水育 / 天然水 / コーポレートメッセージ / 酒の基礎知識 / 黒ウーロン / 自動販売機 / CO₂削減 / ウーロン茶 / 3R / 酒のつきあい方 / 森林と水 / ビール / 水と環境 / 節水汚さないための工夫 / 三菱自動車 / 節水CO₂削減 / プロ野球 / 東日本大震災オーソリティ / テニス / ふれあいサッカー / 小学生サッカー / 吉野や / 1964東京オリンピック / 応急処置 / サッカーイベント / 野球 / 震災 / チャリティ / 野球 / Jリーグ / 小学生サッカー / ZETT / 骨盤ダイエット / NIKE / 生活習慣 / 生活習慣予防協会 / 少年野球団 / 復興支援Adidas / Alpen / 新体操地域総合型スポーツクラブ / サッカーチャリティ / ミズノ地球環境 / サッカー健康 / サッカーJOCエリートアカデミー味の素 / スポーツ少年団 / キッズわいわいサッカー日清食品 / スポーツボランティア / 野球憲章 / ボランティア

〔後期〕 学生が探したテーマ例

コンビニから見る現代人の生活習慣の変化 / 日本の新幹線 / 鉄道の特徴—鉄道の長所と短所 / コンビニの利用客の増大と個食化 / パロセロナ戦術アナライズ / 行動力で成功する人の7つの習慣 / スーパーの従業員 / 日本人にとってのコンビニ—コンビニ経営に関わる戦略と日本人の利用 / 深刻な水不足と水汚染 / 外食産業の問題点 / スーパーの商品販売 / ゲームメーカー・SEGAの企業活動の調査 / 各コンビニによるサービスの違い / サッカーが世界に広まった理由 / 子どもの価値 / 頭痛と予防 / 一夫多妻のメカニズム / いじめとは何か / 中日ドラゴンズからプロ野球を考える—中日ドラゴンズ強さの秘密 / ダイエットについて考える—健康的にやせられる方法 / 社会人として大切なこと / コミュニケーション力について / 沖縄の未来はどうなる？—沖縄県民の想い / バリアフリー / 二酸化炭素と地球環境—人が利用するわけ / 自分の魅力を引き出すファッション / 魔法ファンタジーの魅力と危険 / 障害と昼寝 / だます心だまされる心—実生活にひそむだまし / いじめとはなにか 等

前期には、web上のデータ資料も手軽に選択できたので、人間健康学科に関しては70%の学生が、地域ビジネス学科では38%が、自由選択課題を探し、レポート作成をしていた。一方、後期は、単行本（新書や入門書を第一資料とすることを条件）からの検索であったため、本を探す、図書館で借りるなどの行動まで必要となり、その結果、自由選択テーマが減った。

前期・後期を合わせてみると、結果的には、両学科とも半数程度の分かれ方となった。子ども発達学科の前期は、全員に異なる絵本を選択させたので、この半数というデータからは外してある。

50名以上の一斉授業であることから、同じテーマでレポートを書かせる方が指導しやすいが、自分の選択したテーマが見つけれられる学生には、できるだけそのテーマのことを調べ、考えることで、「自分の学び」を自覚させたかった。選択時に、レポートにしやすい例をかなり与えてきたのであるが、授業中に使ったプリントをそのまま要約し、レポートにしていた学生が半数いることは事実として、対応を考えていきたい。さらに、授業時と同じテーマでレポートをまとめると、発表会ではまったく同じ発表が重なり、個性のない発表会になってしまうことも危惧している。

始めは、小さなテーマでもよいが、学科の他の授業から聞いたことや調べてみたいことを決め、取り掛かることが初年次の「大学生になる」ことであると促すことが重要である。

② レポートテーマで分かれる学生5層

後期の授業の中で、レポートテーマによって、学生のレポートへの関わり方が多様化していることが明らかになった。発表会に向けて、自由課題でレポートを選択しようと指導を始めた後期第9回目から、学生の対応がかなり異なっていることが判明した。レポートの課題のアンケート調査や書き終えたレポートから、その割合が5つに分かれ、それぞれの層に合わせた支援を実施した。

11月時点で、レポートの自由テーマを自ら選択し書き進めていたA層、自由なテーマ選択をして本を借りてきたが、その本の内容が難しすぎて苦戦していたB層、授業で要約練習し、ワークシートが数枚あり、それをもとに無難にレポートにまとめられそうなC層、要約のところの授業を欠席し、レポートの全体像がつかめていないD層、欠席が多くワークシートも書けないままに

いるF層と分かれていた。後期に提出されたレポート（両学部）からみて、A層とB層が30%、C層が26%、D層が20%、F層が24%と、均等に分かれている現状が明らかになった。

このように、4、5層に同程度の割合で分化しており、どういう基準で開講していくことができるのか大きな課題となる。

- A層：自由課題に対して、自分で本を借りてきて、積極的に取り組む
B層：自由課題で選択するが、適切な本の選択に戸惑う
C層：授業内で紹介した本からの引用プリントで、二つの事例で書く
D層：授業内で紹介した本からの引用プリントで、一つの事例で書く
F層：レポートが作成できない

③ レポートの序論・結論

（i）文字数の伸長

本節では、学生の主体の表れる表現部分、すなわち、序論部分と結論部分に注目した。

前期と後期のレポート表現を単純に比較することは難しいが、受講生が「要約や引用したところ（本論のところに主に書かせた箇所）を除いた文字数」の比較から行ってみた。言い換えると、学生の主体的な感想や意見が現れているところであり、本稿では仮に「主体的表現」と名付けておくこととする。調査対象は、前期・後期履修し単位取得したレポートから、2割を学科人数割合に比例して抽出したものである。具体的に調べたものは、「1. はじめに」「3. おわりに」の記述量に加え、「2.（本論）」の中の意見やまとめの表現部分の文字数である。

- ・前期レポートの主体的表現記述量 平均 466文字
- ・後期レポートの主体的表現記述量 平均 574文字

であった。そこから、後期には、108字の増加が見られ、字数の伸長が確かめられた。この108字は、いくつかの意味を持つと考えられる。

第一に、前期に比べて、身近な生活をテーマにしたことから、学生が「書こう」という方向に向かったことの証しである。第二に、受講生が、前期のweb資料よりも、後期の活字本資料を読んだことによる意味とみることもできる。第三に、半期が過ぎて、受講生の学習習慣から生ずる成長とも言えよう。後期レポートへの挑戦意欲も影響したかもしれない。本に書いてある内容を自分なりに要約し、そこでわかったことを表現し直すという繰り返しのなかで、言葉が増えていくともいえる。こうしたいくつかの要因からの記述量の変化と捉えることができるのではないだろうか。

（ii）テーマ選択と主体的表現

前期に、自由選択テーマとしたのかどうか、後期にさらに自由選択としたかどうかで、4種に区分した。テーマ選択の態度と主体的な表現の伸長度を調査した。本調査レポートは4つのテーマ選択の方法から構成されている。

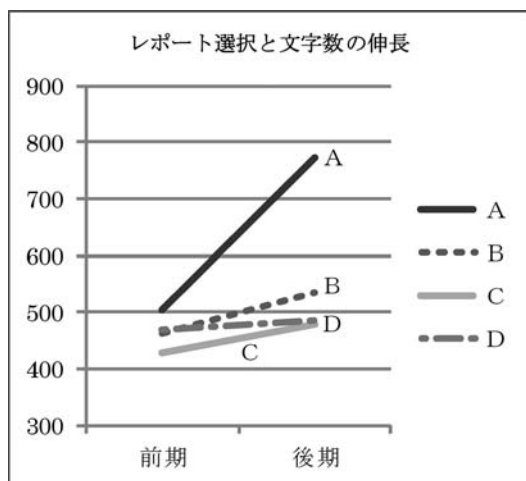
A：自由テーマ（前期）→自由テーマ（後期）のレポート

B：指定テーマ（前期）→自由テーマ（後期） //

C：自由テーマ（前期）→指定テーマ（後期） //

D：指定テーマ（前期）→指定テーマ（後期） //

レポートのテーマ選択の種類と主体的表現の文字数との相関をみた結果が、左のグラフである。



Aから順に、積極性・主体性が備わっているタイプとみることができる。A～Dのタイプのそれぞれ前期・後期のレポート字数（箇条書きによる引用や要約など調べた箇所を除いた文章の字数）がどのように伸びたかを関係付けて表している。この図からも、明らかに、Aタイプの自由選択しているレポートは、明らかに文字数に伸びが見られ、平均269字の記述が増えている。それに対して、Bタイプ73字、Cタイプ50字と、若干ではあるが伸びている。Dタイプは、平均で13字増

加であり、書かされている感じの多い学生にとっては伸びを認めることが難しいことも明らかである。

自由テーマで、初年次教育のレポートを書かせることは難しいことである。しかし、「大学生になる」という初年次教育にとって、ほんの僅かな自己選択から始めていくことの意義が大きいことも、この相関から読み取ることができる。

補足として、積極性や主体性を伸ばすために、次年度からできる一つのきっかけがあることを提示しておきたい。それは、今年度の学生が書いたレポートを提示することである。先輩の残してくれたレポートは、受講生にとってわかりやすい目標になる。この目標に向かって、さらに乗り越えていこうとする学生を期待したい。

(iii) 主体的表現から

実際のレポートに書かれた主体的表現から引用しつつ、どういう表現力をつけていくことが重要か、整理しておきたい。ここでは、結論部分の表現に限って、指導していくべき項目を挙げておく。

留意項目	具体的支援	学生の文章例
①短い記述	<ul style="list-style-type: none"> ・わかったことの整理・立場の違う考察・次に調べたいことについて、2文、3文と増やすこと ・具体的な表現にする練習 	今回のレポートで、……がわかった。次回のレポートでは、……について調べたい。(2文)
②抽象語・上位語	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な表現にする練習 	意味・社会力・課題・実践だけの繰り返し

③自分の立場を叙述	<ul style="list-style-type: none"> ・立場の違いや見方の相違を明らかにして、自分の立ち位置を書く ・二者択一ではなく、総合的にそれぞれの良い点・問題点が洗い出せる練習をする 	コンビニ24時間営業は、よい点、悪い点、どちらにも当たるので難しいところだ。
④同じ言葉の繰り返し	<ul style="list-style-type: none"> ・副詞・動詞・名詞の繰り返しを、類義表現で置き換える ・評価語の練習 ・文末表現の練習 	まだまだ／と思う／だろ うか／現代／現在／今回 ／いろいろ／さまざま／ しっかり／
⑤短絡的な印象を述べる表現の使用禁止	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の書き換え練習 	すごくいい／微妙／普通 ／すばらしい／誇れる／ よくない
⑥名詞止め	<ul style="list-style-type: none"> ・最後まで叙述する練習 	ファッションは、自分から積極的に楽しみにいくもの。
⑦誤字・脱字 誤った表現	<ul style="list-style-type: none"> ・同音異義語（漢字熟語の問題・変換ミス） 	こうゆう場合／関心・感 心／東邦・東宝
⑧句読点	<ul style="list-style-type: none"> ・1文に句読点を打つ練習 	私はコンビニでバイトをしているので今後はコンビニを利用することが多い客層について観察したいと思う。
⑨文末の不統一	<ul style="list-style-type: none"> ・書く場面に応じて、文末を統一する練習 	
⑩主語	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて「私は」を書くこと 	僕は／自分は

上の一覧から、①～⑤に関しては、単純な書き換え練習では直らない部分である。本論を踏まえた上で、具体的に描写し、表現する力が必要である。このような主体と関わった部分の表現を伸ばしていくことで、レポートのみならず、観察文や報告文的確な形に近づくことになる。

（iv）文章の統括機能

文章は、読む時にも、書く時にも、意味的なまとまりで単位を作っているものである。佐久間まゆみの「文段」の見方である⁽³⁾。そこで、文章を読む時に、1項目という単位を重視し、新書本の1項目（1000字～1500字）を読むことを授業内でも行ってきた。同様に、書く時にも「見出し」をつけ、ナンバリングすることで、序論、本論、結論という文章の統括機能を使い、区分し、分けられた内容に統括作用が生ずるような仕組みを入れてきた。言い換えると、ワークシートのフォーマットは、この文章の統括機能を反映させる形で、作成してある。

こうした指導を行ってみたが、前期提出されたレポートを点検すると、題名が未記入5%「見出し」未記入30%の結果である。実際のところ、「見出し」の意味や「見出し」をつける方法について、多くの質問を受けた。しかし、後期提出のレポートには、ナンバリングした3章構成

(はじめに一本論—おわりに)の「見出し」がほぼ立てられていた。見出しについての質問も大きく減った。これは、前期に1度練習して、2回目作成のレポートであることと、一編のレポート実例を学生に提示したことによるものと思われる。

レポートの構成を意識させることも、読解との関連でさらに指導の必要なところである。これは、「レポートを書く」活動以前の、情報を整理するための基礎的なリテラシーと関係が深い。活字本では、わかりやすい構成に統一されていることが多い。本年度学生に紹介してきた「新書」では、1冊が5、6章構成、(3、4節)、3～10項目のスタイルを取っていることが多く、1項目の文章は1000字～2000字程度になっていて、バランスがよい。この最小単位の1項目を読む練習を行う時に、「見出し」が「究極の要約」になっていることも意識化させ、読解リテラシーの一つとして、身に付けさせたい力である。「新書」は、物語や新聞記事とは違って、統括機能がバランスよく使われているところで、初年次の学生にはわかりやすい形式を持った文章であろう。

(v) レポートの中の「引用」の意味

最近の大学生レポートでの剽窃は目に余るものが多い。自分で一切考えず、写し取っているケースもあることは述べるまでもない。本講座のレポートを書くところでは、授業中に、自分の手で下書きを行い、自分の体験(主観的表現)も記述させている。提出時には、この下書きとボールペン清書、word入力レポートの3回に渡る書き込みをしているので、まるごとの剽窃はほとんど見られなかった。

しかし、レポートの書き方が複雑で、面倒である学生、書き方がよくわからない学生が、2年次以降で剽窃をする可能性は大いにあるだろう。教員が絶えず「書き方」指導を繰り返しつつ、自分の問題意識でレポートを書かせていく指導が不可欠である。レポートを書くという行為は、自分の問題意識から出発するものであり、自分への掘り起しである。そこで、自分を知るということにもつながっていき、本学の目標である「就業力」育成に関係してくるところである。

さて、剽窃を避けるためにも、引用の方法を確実に身につけることが必須となる。後期レポートの引用文献について、引用した注記番号がないレポートが32%、引用文献の記述がない30%となっている。前期から、授業中に何度も小見出しの説明、引用文献の意味を解いてきた。それでも、本文中への引用の注記やレポート末尾への「引用文献」の記入ができない学生がいた。意味もわからずに書いている学生も含めると、レポートにおける主体(筆者である学生自身)と他者(調べた本の筆者や書かれている対象者)とを区別して表現する難しさが想像できる。「資料テキストを取り込みながら検証・説明できる自己」を鍛えるには、大学1年生ではかなり困難であり、学年が進むなかで、さらに育てていく必要がある。

これを裏付ける事実として、レポート内に取り込む「予告文」<例:「参考にした資料は、〇〇著『〇〇〇〇』である。(注①)」>を記入することに大きな抵抗があったことが挙げられる。今まで、読み手に対しての説明を書くということを行った経験がないことの証しである。また、レポートに取り上げる観点を二つ以上挙げる場合に、同等列举、原因結果、現状と課題などの論

理的手順に気づけていない学生が大半であった。

レポートの中には、主体的な疑問と他者の検証（引用を用いる）が存在し、それをまとめて、さらなる読み手という他者に伝達する二重の構造を持っている。こうした異質のものを説明するには、説明言語が必要になるのであるが、こうした表現に至るには、何度もレポートを書き、話し伝えながら練習していくなかで、育てていかないと困難であろう。

後期の授業中、引用文献や注記に関する質問は随分減ったが、本文中の注記が欠落、引用文献の記入の欠落は多かった。最終的に、学生間の相互読み合いのなかで、形式上は補うことができた。これは、あくまで形式的に「レポートの書き方」として引用の記述をしたと考え、今後も留意しなければならないところである。

2 「書くこと」を支える力

(1) 図書館活動

本年度は、大学図書館で活動シートを記入するという時間を1時間だけ実施した。大学図書館ガイダンスが前期に行われた後、後期に入った2回目の授業である。今回は、じっくり読むというよりは、本の書誌（奥付）を確認すること、世界の広さを感じ取ることを目的とした活動に留まっている。図書館で行ったワークシートには、下記の項目をメモさせた。

- ・ 書誌（題名・著者名・初版年・出版社）
- ・ 請求番号
- ・ 新書を選んだ理由
- ・ 気になった章と節の見出し

多くの学生が、具体的な「本」を前に、図書館の本に関心を広げた感想を持ったようである。当日の紙ポートフォリオから、図書館活動での感想の一部を以下に記す。

- ・ 読んでみたい本が見つかった。
- ・ 新書よりも普通の本の方がレポートには合っている気がする。
- ・ 集中して本を選べた。
- ・ 新書に興味がわきました。
- ・ 新書はたくさん種類があっておもしろい。
- ・ もっとゆっくり本を読みたい。
- ・ 本をあまり読まないけど、今回の授業で積極的に本を読もうと思いました。
- ・ いつも本を見ないからずいぶん久しぶりに見た。
- ・ 新書は難しそうだった。
- ・ 難しい本だったので、ちょっと理解できなかったが知るきっかけになったのでよかった。

図書館活動への記述のなかで、「行くべきではない」、「退屈」というマイナス評価はなく、読書を受け入れる前向きな姿勢が感じられた。

（２）紙ポートフォリオ

本学では、2011年度春からiPod touchでの受講履歴や目標管理、出来事ブログが進んでいた。こうしたeポートフォリオに対して、「東邦基礎Ⅱ」では、紙ポートフォリオを15回続けてきた。WiFi環境の教室でなかったこともあるが、紙に自分の字で書き続けていく活動には、一目で確認できるわかりやすさもあった。出欠席の回数を確認する時、この紙ポートフォリオには説得力のあるところが多かった。

授業のなかで、学生は授業中に、漢字学習にかなり注意を払っていることが分かった。後期は、先輩のプレゼンテーションを聞く、図書館活動、アンケート調査、要約力調査などと、特別な授業内容を入れ込みながら開講していたので、そうした活動への反応も、各時間に見られた。

（３）グループ発表会

後期14回目の授業時に、学内全教職員に向けて公開の形で、受講生同士の5人程度の発表会を実施した。レポートに記入した調べた内容に自分の考えを加えて、3分間話すという簡単なものである。参加した教職員も、学生と並んで座ってもらい、「聴く」という役割を果たしてもらった。

発表会までに、自分の学習したことを3分間話す練習、当日のグループ作りなどをリハーサルし、発表も一部分実際に話してみた。これだけ実施してみても、当日、声が出なかったメンバーもいて、話す・聞く活動をさらに日常的に取り込むことが必要であることに気づかされた。

また、学内全教職員に公開したことで、以下の意見を受け取ることができた。

- ・学びの総括の場を設けることは意義があり、これからも時間が許せば参加したい。
- ・初年次教育として、全学的取り組みになるとよい。
- ・基礎演習との連携を図るよう改善した方がよい。
- ・成功体験が少ない学生に「やればできる体験」を積み重ねる仕組みを作っていくように。
- ・人前で話すことは、社会に出ると当たり前で、学生の間でも、ゼミでも必要な重要なこと。
- ・19歳の段階で、発表態度を正すことより、あの場のあることの方が価値を感じる。
- ・授業の目標と適正人数のアンバランス。
- ・TAの必要性。
- ・入学時期に比べての成長を感じた。
- ・是非継続してほしい。

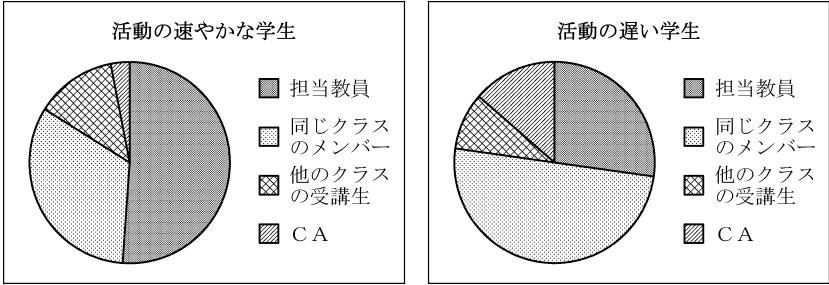
本学では、学科でのゼミナール大会、学年ごとの発表会、卒論研究発表会などが定例化されていることから、初年次においても「公開型グループ発表会」を開催し、学生に発表の機会を作っていきたい。

（４）受講生のアンケート記述から

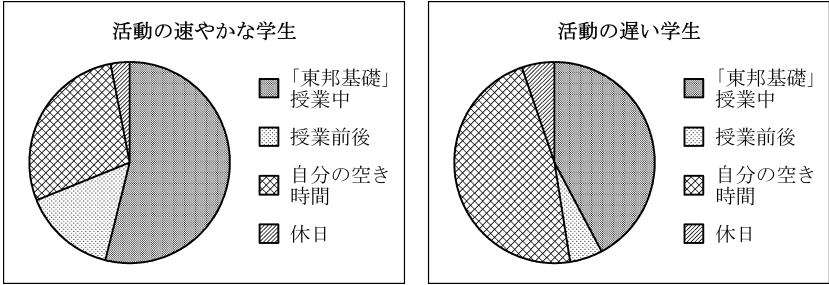
後期第15回の授業時に、「東邦基礎」独自のアンケートを実施した。その結果を、以下に整理する。

レポート提出日を、発表会より2回早めて設定したことから、「活動の速やかな学生」と早期提出日に出せなかった「活動の遅い学生」がいた。「活動の遅い学生」は、授業への理解も遅れており、支援の必要な学生となっている。また、「活動の速やかな学生」は「遅い学生」の2.5倍の人数であった。円グラフでは、割合として比較している。

① 質問があったときに、誰に尋ねたか？



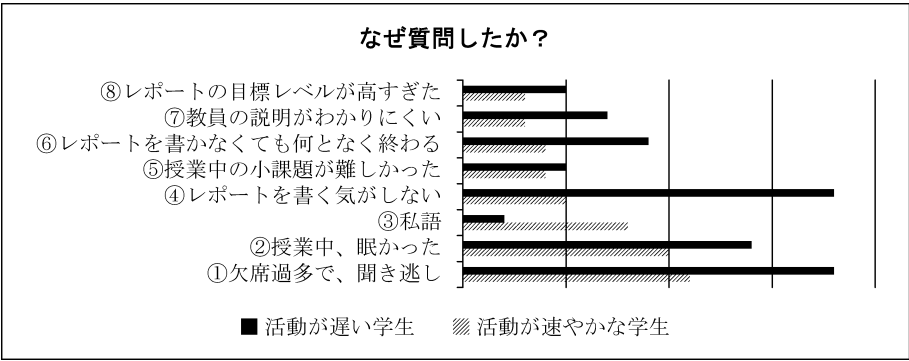
② 質問の時間



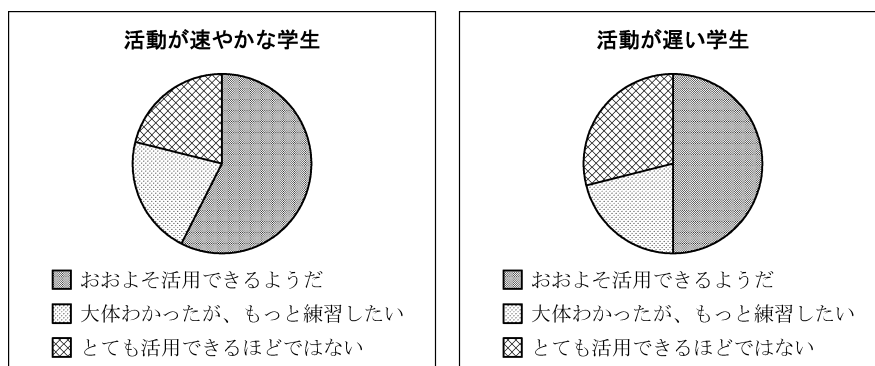
①②から、「活動の速やかな学生」は、教員やクラスメンバーに、「東邦基礎」の時間帯で質問する傾向があるのに対して、「活動の遅い学生」は、同じクラスのメンバーに、授業中か空き時間に助けてもらう傾向がみえた。こうした質問の多さは、教員の説明のじゅうぶんでないところもあるだろうが、具体的に、受講生が自分でいざ何か書こうとした時にどうしたらよいのか、戸惑っている実態を示している。

③ 質問するに至った理由

「活動の速やかな学生」「活動の遅い学生」のいずれも、聞き逃したことを補う形での質問が多かった。「遅い学生」中には、欠席過多、レポートを書く気がしない、授業中眠かった場合が多い。

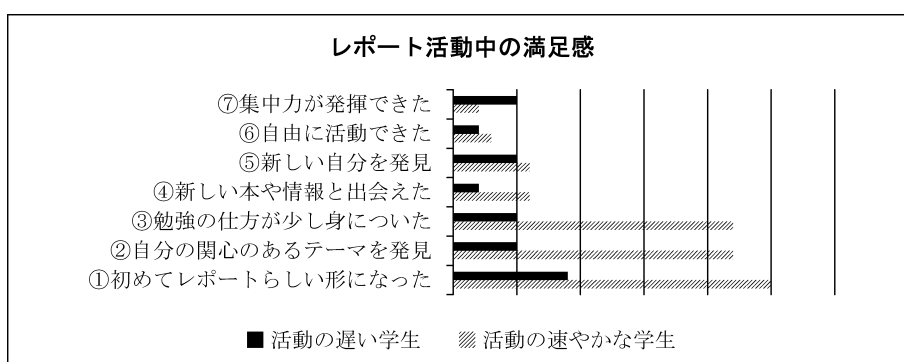


④ レポート活用の期待



提出者の65%は、おおそのレポート活用が考えられているが、さらに継続的な積み上げの必要性を示している。

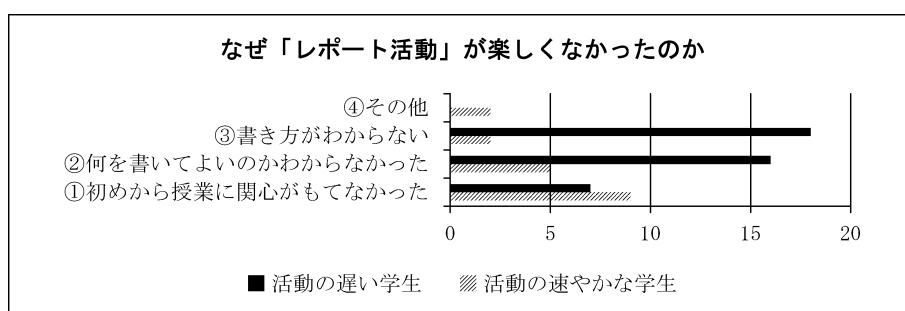
⑤ 「レポート」活動の満足感



初年次教育を設計するにあって、読解リテラシーや表現学習を中心に置く「リメディアル教育」とのバランスが難しい。1年生に「レポートを書く」という課題を与えることはどう位置づけられるのかと疑問視することもあった。しかし、アンケート結果を見たときに、スタディ・スキルズとしての「レポート作成」は受講生の自信にもつながることが明確になった。どんな些細なテーマであっても、指定されたテーマであっても、最後までやり切って書き上げることの重要性、形ある「レポート」に仕上げることの意味は大きいことが明らかになった。④の調査から、活用できる学生はすべてとまではいかないが、達成感は大いなものである。こうした自信を、2年生につないでいきたい。以下に、受講生のアンケート調査結果を示す。

- ・「レポート」を書くことに苦手意識をもっていた私でしたが、今回受講して、意識がゆるくなったと思います。
- ・東邦基礎で大学入学前に心配だったレポートを進めていく力をつけることができました！
- ・レポートを書くことは、今でも苦手だけれど、前よりは抵抗があまりなく、楽しくできた。
- ・1年間で、レポートを書く場所が東邦基礎以外で多くあったが、その時に学んだことを活かしてまとめたレポートを書くことができました。これからも学んだことを生かしていきたいと思います。

⑥ なぜ「レポート活動」が楽しくなかったのか

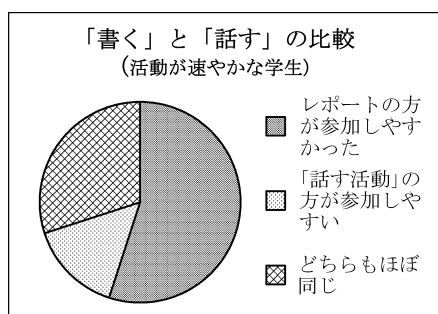


授業に参加しない学生は、当然ながら「書き方がわからない」「何を書いてよいのかわからない」ことになり、楽しさまでには至らない結果となった。自分なりにやり切ったという達成感だけは、1年次で味あわせておきたいところであり、今後の工夫が必要になってくる。

⑦ レポートと「話す活動」とでは、どちらが参加しやすいか

授業中に、声を出す活動に対して、回避しようとする姿勢の学生が少なからずいる。その結果が、下のグラフになる。学生は、「話す」ことへの抵抗感が強く、社会へ出ていく学生がまず、自然に話せるようにすることを重大な課題としておきたい。研究室でレポートを提出に入室してくる場合、学生は訥々としながらも話すことができる。しかし、教室という大きな場所ではすっかり口を閉ざしてしまい、不安を感じている学生もいる。入学前セミナーで、グループワークをした時に声を出していたように、話しながらワークをしていくような仕掛けが不可欠である。

日常生活で「話す・聞く」ことが大半であることを考えると、話し聞きながらの授業形態をさらに取り入れ、自然な流れで、グループ発表会へとつないでいきたい。そのためには、レポートを書くことと発表することのつながりを強調していきたい。さらに、前期から1年の目標を明確に、何度も示し続けることで、モチベーションを上げていくことも必要になる。



⑧ 他科目との関連意識

本講座の内容は、学部学科の土台となる学習の方法を学ぶ科目である。そこで、他科目でのレポート作成に活用する意識をもたなければ、意味のあるものではない。

アンケート結果から、関連する科目を質問したところ、関連科目の記述が少なかった。この点についても、「レポートを書く」だけでなく、「意見や感想を書く」「短い文章を書く」場合にも通じるところがあるとして、応用することのできる内容であることを一層、受講生に自覚化させ

るように働きかけていかないと、本講座の本来の意味がないことも改めて気づかされた。

東邦基礎科目群の連携と同時に、こうした科目の関連を初年次から学生にも伝えていくことが必要になってくるであろう。

Ⅳ おわりに

2011年度「東邦基礎」の30回の授業報告を行い、そこから、受講生の書く力、課題への関わり、伸長度、課題への関わり方などを記してきた。今後の「東邦基礎」開講へ向けて、次の3点に絞り、練習を重ねていくことを中心課題としたい。

第一は、最終目標であるレポートの作成や発表会を意識させつつ、「具体的でわかりやすい説明力」をさらに伸ばすことである。「字数1000字のレポートを書くこと」を目標にすることではなく、「情報を分類・整理すること」「書くことで物事を違った立場でみること」などを行い、自分自身を確かめていく活動を行うことである。学生には、初年次に「文章を書くこと」「人に伝えること」を数多く実践させ、2年次に進ませたい。

説明力は、大学での学習の基本であり、説明や報告や観察記録、意見文などにも応用できる言語運用能力であり、本学の初年次教育に不可欠な支援である。箇条書き、ポイントを1枚の紙に整理する、短い文章に要約するなどの基礎練習を重視していきたい。

第二は、話す・聴く活動につながるように、メンバーと話す聴く機会を一層増やしていくことである。書くことが苦手な学生も、話すことと書くことの往復運動のなかで書かせていきたい。一方、話すことが苦手な学生には、グループ内で話す場面を授業内で必ず設定し、グループワークを行いつつ進めたい。グループの作り方も、固定せずに、開講中に何回か入れ替えて組ませていくなどの工夫をしていく必要がある。

第三は、図書館へ出かけることである。自分の関心と読みやすい本とのバランスのなかで、本を読む方法を知り、大学生の情報収集を活字本から実践していきたい。そのためにも、今の大学生が読みやすく手に取れる本を、図書館に配架することに協力していくことを課題としたい。

こうした3点の実践を通して、愛知東邦大学版『書くこと・話すこと』のスタンダード」の仮説と検証を行っていくことが、次への課題であると考えている。そこで、2012年度への仮説として、教科書『東邦基礎——大学生のためのスタディ・スキルズ——』⁽⁴⁾を作成している。その中には、次年度の学生の一つの目標提示として、今年度の受講生が書いた文章も取り込んであり、初年次の学生の学びのスタイルを例示したものになっている。この教科書を仮説材料として、本学の基礎科目との連携を作っていく契機としたい。

<参考文献>

- (1) 山田礼子「日本における初年次教育10年を踏まえ、次の展望は」河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』2010年 東信堂 pp.248-264
- (2) 牧恵子『『あらすじ』考——『読書』と『読み』の教育の関連から——』愛知教育大学大学院紀要「国語研究」9号 2001年

- (3) 佐久間まゆみ編『文章構造と要約文の諸相』1989年 くろしお出版
- (4) 牧恵子『東邦基礎——大学生のためのスタディ・スキルズ——』2012年4月出版予定 三恵社

受理日 平成24年3月26日